



いちのせきから ストップ温暖化



みんなで「デコ活」しようよ



デコ活とは：二酸化炭素 (CO₂) を減らす (DE) 脱炭素 (Decarbonization) と、環境に良いエコ (Eco) を含む「デコ」と活動・生活を組み合わせた新しい言葉です。



今年の夏は何とか乗り越えたけど、南の方では、今年も猛暑日が続いたよね。

石川県ではこれまでにないような大雨が発生して、震災に加え大変なことになったよね…。

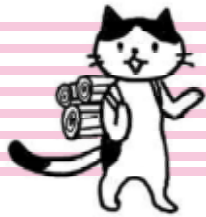


地球温暖化が暴走しないよう、CO₂の排出を減らし温度上昇を1.5℃以内におさえる必要があるといわれているんだ。

環境省では、脱炭素につながる活動として「デコ活」を推進しているんじゃ。



省エネや再エネの活用など、みんなで「デコ活」して、CO₂を出さないようにすることが必要だね。



環境省では、2030年までに家庭からのCO₂排出量の66%削減を目標にし、CO₂削減に向け、「デコ活」「脱炭素につながる新しい豊かな暮らしを創る国民運動」を展開・推進しています。

“環境省デコ活”で検索してみてね。
手軽にできる断熱DIYの紹介などもあるよ。



一関市民フェスタに参加しました

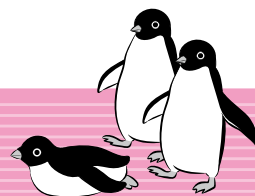


8月25日に千厩のアイスアリーナで開催され、会場のテントにパネル展示、ビデオ上映、手回し発電機の発電実験キットを出展しました。発電実験キットで子どもたちに発電実験をしてもらい、LED電球の方が従来の豆電球よりも光らせやすいことを感じてもらいました。これによってLED照明が省エネになるということを実感してもらえたと思います。会場では43人の方に立ち寄っていただき、住宅用太陽光発電について、家庭のエネルギーの費用やCO₂の排出を抑えられること、市の補助があることなどをお話しさせていただきました。皆さんにはさらなるCO₂削減について考え、取り組んでいただける機会になればと思いました。



【2024年度 環境セミナー】

「南極から見る地球の未来」



講師：岩手日報一関支社 編集記者 菊池健生 氏

2024年5月25日（土）一関保健センター1階、多目的ホールにて、環境セミナーを開催し、約70名の方にご参加いただきました。講師は、岩手日報一関支社の菊池健生編集記者です。第63次南極観測越冬隊に参加された体験をお話いただきました。

菊池様は、盛岡市出身、東北学院大学経済学部ご卒業後、岩手日報社様に2013年に入社され、第63次南極観測越冬隊としては、2021年11月から1年4カ月間、日本新聞協会の代表記者としてご同行されたそうです。一関支社には4月に赴任されました。

冒頭に、入社1年目はカメラマンとして活動、その後、休職してのアメリカのロングトレイルへの挑戦、その後、南極観測越冬隊に同行と、自己紹介をいただきました。



講演では、カメラマンとしてのすばらしい技量が垣間見える、数々の写真、タイムラプスやドローンを駆使した動画を交えて、迫力ある映像を交えてのお話しをご披露いただきました。

ところどころに、南極大陸の氷の厚さや、ペンギンの身長などのクイズも交えながら、命を落とした方もあるブリザードや、マイナス89℃にもなる厳しい自然状況、白夜や極夜など、日本では想像もつかない状況をご説明いただきました。

南極では、各担当者が様々な研究をおこなっているそうですが、地球の過去と現在の気温を比較する研究も行っているそうです。古い氷中の気泡からCO₂濃度の変化と気温の変化を調べているそうです。また日本の越冬隊では、以前は埋立処分していたゴミを、毎年持ち帰っているそうですが、全てのゴミを撤去するには、15年程度かかるそうです。

菊池様は、「地球は大きい人間は小さい」、「人間は簡単に自然を壊してしまう」、「人間は力を合わせて大きなことができる」ともお話されており、地球温暖化については、大雨などの災害リスクが高まる中、自分の生活を自分で考えていくことが大切と話されて、講演を締めくくられました。

私たち一人の力は小さいものですが、少しずつ仲間を増やし、温暖化に対する行動を広げていくことができれば、国や市で設定している目標も達成できるのではないかという希望が見えた講演でもありました。



広報eco37号クイズ

Q1 南極の氷原の下は何があるでしょうか。

- a. 海
- b. 大陸
- c. ブラックホール

Q2 2022年に南極の海氷が溶けて、繁殖に大きな被害が出た動物は？

- a. シロクマ
- b. トド
- c. コウテイペンギン

Q3 地球温暖化が暴走して南極の氷が全部解けたら、海水面は今より何m高くなるでしょうか。ちなみに一関市役所は海拔30mです。

- a. 1m～2m
- b. 10m～20m
- c. 50m～60m

Q4 地球温暖化の暴走を抑えるためには、温暖化の程度を産業革命以前に比べて、何度以下に抑える必要があるでしょうか。

- a. 1.5℃以下
- b. 3℃以下
- c. 4.5℃以下

クイズに正解した方の中から抽選で5名の方に「南極探見500日 岩手日報特別報道記録集」を差し上げます。

【応募方法】 ハガキに、クイズの解答、応募者の氏名・住所・電話番号を記入の上、IEL事務局（〒021-8501 一関市竹山町7-2 一関市役所生活環境課内）までお送りください。当選の発表は、景品の発送をもって代えさせていただきます。ご応募お待ちしております！

【締 切】 令和6年11月30日消印有効

育成経験から伝えたい 農作物と地球温暖化

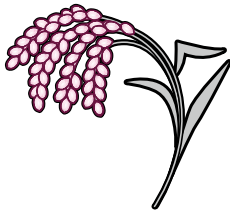
私事です。花泉町に移住して25年、近所の篤農家の言葉を頼りに見様見真似で米と野菜を作り、それなりに収穫できてきました。しかし、地球温暖化の影響が大きくなり、ここに来て普通にうまくいったことが年々うまくいかなくなっています。現にこの四半世紀、変動しながらも気温が上昇、特に昨年は飛び抜けて著しい高温を記録し、今年もその傾向が続いています。雨の降り方も慈雨が極端に少なくなり、降らない日が連続し、そして豪雨ばかりが目につきます。

水稻では食味ランキング落ち

1999年秋、初めて収穫した「ひとめぼれ」のなんと美味しいこと、正に“ひとめぼれ”でした。それもそのはず、当時県南産の「ひとめぼれ」は食味ランキング「特A」の最高評価を受け続けて6年目、翌年から「岩手県最南端の地花泉で生産」をキャッチフレーズに艶やかな「ひとめぼれ」を消費者に直接販売してきました。

しばらくして、九州方面ではカメムシによる斑点米や高温障害による胴割れ米や白濁米が混入するようになり、一等米比率の低下が報じられていました。その後、当地でも斑点米が出現して、「JAいわて南(当時)の水稻農業申込書」の一覧にカメムシ対応の農薬が加えられ今も続いています。そして、今では「農作業標準賃金表(市農業委員会)」に色彩選別機による作業も追加されています。カメムシという災いが南からやってきたのです。

食味ランキング「特A」は2003年の冷害の年を除き続いてきましたが、2017年、2019年以降は連続して「A」または「A⁺」にランク落ちしています。このころから我が家の米もカメムシ防除薬を使用しないこともあって斑点米が目立つようになり、白濁米の混入が多い年もあり、艶やかな「ひとめぼれ」とは言い難くなってきています。特に7~9月の気温が平年と比べて3.5℃も高かった昨年産の米は粒が小さく、白く濁り、その発送の際ついに「岩手県最南端の地花泉で生産」というフレーズを削除しました。北海道産の米が美味しいといわれる昨今ですが、南に位置し気温が高いことが災いとなってきました。さて、今年は作柄が良さそうなので「特A」復活となるでしょうか。



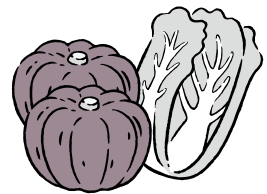
農薬を使用しない野菜栽培は困難に

畑には自給用などの野菜を年中作付けしていますが、最初に言われたことは「白菜は8月10日までに種まきをするように」、「無農薬での栽培は難しい」でした。当初、その時期に白菜の種をまき、農薬を使用しないことにこだわると本葉2、3葉の時から光沢のある黒藍色の1~2mm程度の甲虫ダイコンサルハムシがやってきました。それでも勢い良く成長するとその食害を克服し、今度はアオムシやコナガがやってきました。それをピンセットで摘まんでいるうちに気温も低下し、10月末には十分に結球した大きな白菜が収穫できました。

その後気温の高い時期を避けようといつの間にかやや遅く種をまくようになりましたが、前述のダイコンサルハムシのサイズが2~4mm程度と次第に大きく、数も増え、同時期にアオムシやコナガもやって来て手に負えなくなってきました。とりわけ、気温の高かった昨秋は9月半ばに2度目のまき直しをしたものの芯が食い荒らされ、満足に結球しないうちに冬になってしまいました。

例年5月の連休明け頃、カボチャの苗を植え付けますが、気温が上がると雨も降ると一気にツルを伸ばし、葉を広げ雌花も咲き、実をつけます。しかし、ここ数年苗を植え付けるとほぼ同時に橙色の8mm程度の甲虫ウリハムシがやって来て、葉に穴をあけ生長を阻害します。今年の初夏は気温が高かったせいか、それにキュウリやズッキーニなどウリ類すべてにやってくるものですから、朝晩畑を一巡りするとその都度100匹ほどのウリハムシを指でつぶしました。それでも、成長不良のまま推移し、実をつけない株もありました。

なお、早くから気温が上昇すると昆虫の発育が速まり、年間世代数が大きく増加し、それに伴って作物の被害量も増大すると予想されています。農薬を使用しない野菜栽培は困難になってきました。

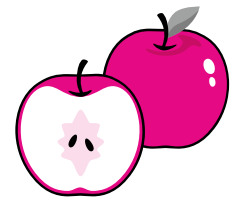


果樹、ここ5年で2度の大規模凍霜害

「JAいわて平泉」の「令和6年春期組合員座談会資料」によると2023年12月末現在のりんごの販売数量は前年比54.1%、なしでは51.1%と半減しました。同資料では春先の凍霜害による「着果不良」や「開花抑制」、梅雨明け以降の高温と干ばつによる「日焼け」などにより収穫量の減少と品質低下が発生したことを原因としています。

近年、冬から春の気温が上昇して生育が早まり、開花期に近づくほど低温耐性が低下します。2023年は4月下旬に、2021年にも4月中旬に上空の寒気が南下し、晴れた早朝の放射冷却現象により低温や降霜となり、大規模な凍霜害が発生しました。以前にも凍霜害がなかったわけではありませんが、知人の果樹農家は「ここ5年で2度もだ!」と経営不安を訴えています。

また、台風が東北太平洋岸に上陸・接近することも多くなり、落下や傷つきも懸念されます。



いつも通りに手入れをし、いつも通りの農作物が収穫できていたのは偶然ではなく、安定した気候の恵みでした。私たちはCO₂などの温室効果ガスの排出と引換えに安定した気候を損ない、豊饒さも同時に失いかけています。このまま進むと気候の暴走により食糧難の事態を迎えかねません。温室効果ガスの排出削減を一刻でも早く、そして大きく削減することに全力を尽くしましょう。

気象防災アドバイザー・気象予報士
佐々木勝裕 (IEL会員)



食品ロスについて考えてみませんか？



2020年9月に公正取引委員会では、大手コンビニは一年間で1店舗468万円分の食品を捨てていると発表しました。1世帯が排出する食品ロスとその処理費は年間6万円に相当、一般廃棄物の処理費用は2兆1500億円以上。食品ロスは日本では焼却、海外は埋め立てなどで処分します。焼却による二酸化炭素、埋め立てによるメタンガスの発生は、どちらも地球温暖化の大きな要因になっています。

家庭系食品ロスには料理を余らせる「食べ残し」、本来食べられるところを捨ててしまう「過剰除去」、未開封のまま捨てる「直接廃棄」があります。家庭では購入前に在庫チェックし、簡単なリストを作って買い物をするだけでも食品ロスは減らせます。

食品ロス削減は世界中の人が全員参加できる地球温暖化対策の1つです。食品ロスを減らすことで、暮らしがかわり、社会を変えることができます。

北米で1980年代より「フードポリシー（総合的 食料政策）」という取り組みが始まり、欧州にも広がっています。

「フードポリシー」とは食から社会を見直すという考え方で、食について顔の見える関係をつくらうということでもあります。

食べ物の生まれる背景に意識を向けることで、食品ロスを減らす効果があります。また自給率の低下という大問題もあります。食べる側としてはもっと危機感を持たなくてはいいのにかかわらず、その実感がなく、危機感はあるがどう行動していいのかわからない人が多くいます。

まずは今まで農業と関係なく都市で暮らしてきた人たちが、食をつくる活動に参加すると、農業に接近して行くことが大事です。

現代人は食べること以外に時間を使いすぎているのかもしれない。忙しくてゆっくり料理をつくる時間や食べる時間がない。だから便利な方を選び、結果、食品ロスにもつながってしまいます。改めて食の重要性や価値を見直す必要があるのではないのでしょうか。

(出典 生活と自治 2024年9月号)

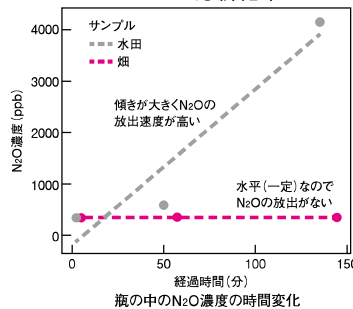
市民科学プロジェクト (シチズンサイエンスプロジェクト)

地球冷却微生物を探せ

広報eco前号でご紹介しました、冷却微生物についてキットを取り寄せて調査に協力しました。実施時期は5月、我が家の畑と水田の2箇所からガラス瓶に土のサンプルを採取しました。サンプルから、採取直後、30～60分後、120～180分後の合計3回気体を採取しました。東北大学に送って、検査していただきました。

一関市弥栄 菅原雪枝(IEL会員)

ガスの分析結果



全国から届いたサンプルのうちN₂Oを吸収する土壌は全体の3～4%しか見付からないため、まだまだ数が少ない状況です。

また、N₂O吸収土壌は水田で見つかることが多いですが、サンプルが人口密集地に偏っていて、山林や水田、果樹園などの土壌が少ないので、もっと集めたいところです。

東北大学 大久保智司特任助教より

東北大学から送られた分析結果

畑はN₂O*の放出はみられませんでした。水田では大きな発生が見られました。全国約2800のサンプルのうち、N₂Oの放出速度が83.88は全国で48番目に高く、多くのN₂Oを発生している土壌といえます。N₂Oを多く放出する土壌には、N₂Oを利用する微生物、地球冷却微生物の候補がいる可能性もあります。水田にはナイセリア属やロドサマース科のバクテリアが多く、珍しい組成でした。

*N₂O (一酸化二窒素) は地球温暖化の要因の一つで、温室効果はCO₂の300倍にもなります。

本の紹介

土のこと考えてみませんか？

まめ科の根にすみつく根粒菌と呼ばれる微生物のなかにN₂Oの分解力が高い種類が発見されています。土壌微生物と気候変動の抑止について詳しく書いてある本です。まさに足元からできる温暖化防止です！

「土がかわるとお腹も変わる」

吉田太郎著 築地書館
2月にIELが一関市内の図書館に
7冊寄贈しています。



「土を育てる」

ゲイブ・ブラウン著 服部雄一郎訳 NHK出版
この本もお薦めです。是非読んでみてください。



編集後記

当協議会の「広報eco」は、平成20年6月に「いちのせきからストップ温暖化」をタイトルに、市からの補助を受けまして、今から16年前の平成20年6月に創刊いたしました。

創刊号の表紙には「この美しい地球が悲鳴を上げている」と当時の情報も現在と相違ない言葉で呼びかけていますが、昨年・今年を体験すると、私たちのこの16年間の行動が十分だったのかと悔やまれる気候危機が世界中で起きています。

この度、今回の「37号」をもって、今までの形の「広報eco」は終了することになりまして、次回からは、市の広報「i-style」の中に組み込まれることとなりますが、これからも地球温暖化に対する「緩和策」と「適応策」を、一緒に行動し続けることを皆様に呼びかけていきたいと思います。

(徳谷喜久子)